744　中央大学剣道部寒稽古

〔『法学新報』第33巻3（375）号　大正12年3月3日〕

○中央大学剣道部寒稽古　部員の永らく待焦れし新道場は迎新匆々落成し第三学期授業開始と共に洋館縦十二間横六間の大道場は開放せられたり於茲本部は新入部員を募集し一月二十日より二月十日に至る間中山、今泉両師範の懇切なる指導の下に寒稽古を挙行せり風鋒刃の如く寒烈骨に徹するの候とて部員の出席は頗る危まれ新道場第一回寒稽古は遺憾乍ら不成功に終らすやとの不安を以て開始せしも事実は之に反し日々三十名を下ることなく多きは六十名の多数を算せり為にさしもに広き大道場も狭隘を感するの好況を呈し遂に六名の皆勤者すら出し予期以上の成功を以て納会するを得たり又先輩萱嶋、清水、川上の三氏も其の多忙を顧みす来校教導の労を取られたり「文は常に処して其績あり武は変に応して其功あり然りと雖も平時も之を

偏廃せは国以て維持すへからす」とは是れ古今の名言安逸惰弱の風は五大国の一として帝国の将来を担ふへき青年の断して排すへき所風雪を物ともせす忍耐克己以て剛健の気風を養ふに非すんは何そ国家の大事に任するを得んや和魂洋才を必要とする秋其表徴とも謂ふへき洋館大道場の開場あり第一回の記念すへき寒稽古の大好績を以て納会するを得たるは自他共に慶賀に堪へさる次第なり。（剣道部報）